



Making Art Different 2005

WHAT IS MAD?

MADとは? —— MADは、独自の講義と現場の議論を重視したコンテンポラリー・アートの新しいエデュケーションを目指します。MADは、2001年よりスタートしたエデュケーション・プログラムで、下記の7つのコースを開講しています。

[キュレーション・インтенシヴ]	現代美術史・理論を踏まえ、展覧会企画の実践を目指します。(4月開講4ヶ月集中コース 上級)	04
[キュレーション+プロジェクト]	キュレーションの歴史や思想などを踏まえて展覧会の企画を考えます。(4月開講12ヶ月コース 中級)	08
[キュレーション+アート・ヒストリー]	キュレーションと現代美術の歴史について考察します。(4月開講12ヶ月コース 初・中級)	12
[アーティスト]	アーティストの自立した活動のための理論的バックアップを行います。(4月、9月、2006年1月開講各3ヶ月コース 初・中級)	16
[オーディエンス]	入門者のための現代美術の鑑賞を行います。(4月開講7ヶ月コース 初級)	20
[マガジン]	海外のアート雑誌から世界のアートシーンを読みます。(4月、10月、2006年1月開講各3ヶ月コース 初・中級)	22
[クリティカル・リーダーズ]	現代美術を考える上で参考となる思想や哲学に関するテキストを深く読みます。(4月、9月、2006年1月開講各3ヶ月コース 上級)	24

MADは、NPO法人アーツイニシアティヴトウキョウ [AIT / エイト] が運営しています。受講生は、各コースの受講と同時にAITのサポートメンバー(準会員)となり、いくつかの特典(AIT主催のイベントへの参加費割引など)を受けることができます。

MAD stands for Making Art Different.

It is the educational programme of the non profit contemporary arts organisation AIT (Arts Initiative Tokyo).

Over 130 students enroll annually in the seven courses offered.

MAD looks closely at contemporary art issues within a broad inter-disciplinary context.

As an independent programme MAD courses are flexible and friendly.

CURATION: CURATION INTENSIVE, CURATION + PROJECT, CURATION + ART HISTORY

近年、「キュレーション」という言葉を以前よりも頻繁に見聞きするようになりました。それは展覧会が、美術館やギャラリーといった特権的な空間にとどまらず、屋外や廃屋、廃校、オルタナティヴ・スペース、あるいは生活空間において開かれるケースが増えてきたことや、これまでの学術的な調査研究と発表といったキュレーションの方向性が見直され、表現を通してより社会的な諸問題への言及や文化アイデンティティーの追究、国際的な文化交流などを目的とした取り組みが出てきたことにもよるでしょう。コンテンポラリー・アートを取り巻く社会の枠組みの変化に伴って、キュレーションの役割や方法についての議論が展開されるなか、コンテンポラリー・アートのキュレーションとは何かを考察し、その可能性を探ります。2005年度は、キュレーション・インтенシヴ、キュレーション+プロジェクト、キュレーション+アート・ヒストリーの3コースを設定しています。

CURATION INTENSIVE



Painting by Federico Herrero, 2003 04-05

キュレーション・インтенシヴ

「キュレーション・インтенシヴ」は、2005年4月から8月にかけて毎週行なわれる短期集中コースで、理論と実践の面から専門的にキュレーションを考える上級者向けプログラムです。週一回のペースで行なわれるクラスでは、受講生どうしはもとより、プログラム・ディレクターとのより密度の高いコミュニケーションが図られ、「ラボ（研究グループ）」的な雰囲気のなかでクラスが展開されます。ワークショップでは、少人数のグループに分かれてキュレーションのプロジェクトに取り組みます。その過程で、コンセプト作りやプレスリリースの作り方などキュレーションの理論と実践を試みます。なお、展覧会制作費の一部として支給される資金を使って、プロジェクトの実現をめざします。

コースの内容を補足するプログラムとして、2005年より新しく1.フィールド・トリップ、2.チューター制度、3.外部との協働を設定しました。チューター制度は、現代美術の分野で活動する専門家をチューターとして迎えることで、実践的かつ発展的な意見交換や、多角的な視点での議論展開を可能にすると同時に、きめの細かいアドバイスを実現します。また、コース開講中にフィールド・トリップを行い、実際に展覧会などのキュレーションの現場を見学し、キュレーターなどと意見を交換する機会を設けます。さらに、アーティスト・コースと連携、あるいは外部のアートプロジェクトやネットワークを紹介することで、より具体的にキュレーションの実践に取り組むことができる環境を作ります。

このコースは主に、将来キュレーターとして専門的にアートに携わりたいと考えている学生や社会人、様々な展覧会作りの現場に具体的に取り組もうとしている方、キュレーションで海外留学を考えている方、キュレーションに興味のあるアーティストなどを対象としています。

Curation Intensive is a four month weekly course that creates a laboratory-like environment in which to investigate contemporary art curating practice today. Students work in small groups towards an exhibition project.

[コースの構成]

このコースは、基本的にレクチャーやワークショップ、フィールド・トリップで構成され、コース終了に向けて、グループでの展覧会作りのシミュレーションを行ないます。

レクチャー・シリーズ

レクチャー・シリーズは、コース・ディレクターやゲスト・レクチャラーにより毎週行われます。

キュレーションの理論:キュレーションを専門的に考える上で基礎的な項目を網羅したもので、現代美術を支える様々な思想、展覧会様式の変遷と作品の変容、現在多様化している展覧会の形式、近年の国際展の傾向などのテーマで行なわれます。プログラム・ディレクターやゲスト・レクチャラーにより、知識と経験を踏まえた専門性の高い講義が行われます。

キュレーションの実践:展覧会の制作におけるマネジメントや宣伝広報、展覧会の記録、資金調達などのテーマを取り上げます。展覧会を作るために何にどのくらいのお金がかかるのか、また効果的な宣伝はどのように行ったらよいかなどについて、実際に展覧会の制作を経験したプログラム・ディレクターやゲスト・レクチャラーを交えて意見交換を行い、様々な視点から自分のキュレーションに対する考え方を明らかにします。

ワークショップ

ワークショップは、レクチャー・シリーズと並行して適宜行なわれます。ここでは、小グループに分かれ、展覧会づくりのシミュレーションを行います。グループでは、互いにアイデアを出し合いながらひとつの展覧会を共同で構築します。テーマを掘り下げ、テキストやキャプション、プレスリリースなど必要な形式や手続きを踏んだ上で、都内の展覧会スペースで展覧会を実現させることを目指します。4ヶ月という短期間のなかで、集中してテーマの設定方法やそれに対するアプローチ、アーティストの選考、広報宣伝、作品展示という流れを総合的、実践的に理解することを目指します。

フィールド・トリップ

06-07

キュレーションの現場がどのようなものかを、実際に足を運んで経験します。ここではキュレーターなどの展覧会関係者と意見を交わすことにより、キュレーションに対するよりよい理解を促します。また、実際の雰囲気をつかむことで、キュレーションに対するイメージが具体的になることでしょう。これは、レクチャーやワークショップとは別に任意の日程が組まれる予定です。*フィールド・トリップに関わる費用(但し交通費は除く)も受講料に含まれます。

チューター制度:外部の美術機関で活躍するキュレーター(チューター)が、レクチャーあるいはワークショップに参加します。

チューターがクラスに参加することにより、議論が多角的になり、現代美術の多様多層性の理解に適した環境が作られます。チューター(予定)=南條史生氏(森美術館副館長)／住友文彦氏(ICCキュレーター/AIT)

プログラム

[レクチャー・シリーズ]

Critical Concepts and Core Texts

モダンとポストモダン—現代美術の「現代」とは何か／「西洋」とマイノリティーを考える—Magician de la Terre (1989) からDocumenta11 (2002) へ

「アートワーク」から「プロセス」へ—複製技術がアートに投げた石／20世紀に現われた「世界」という空間と表象—写真、ビデオ、ドキュメンタリー

Curatorial Studies

キュレーション・マッピング—国際展、国際巡回展、地域ベースの展覧会など多様化するキュレーション／キュレーターの仕事—展覧会の企画立案、予算・運営管理について

キュレーションの歴史—19世紀の博覧会から美術館の誕生、そして美術館を越えて／キュレーションのアイデアとコンセプト—近年のキュレーションの形式とテーマの傾向／スペースとは?—美術空間とそれへの抵抗

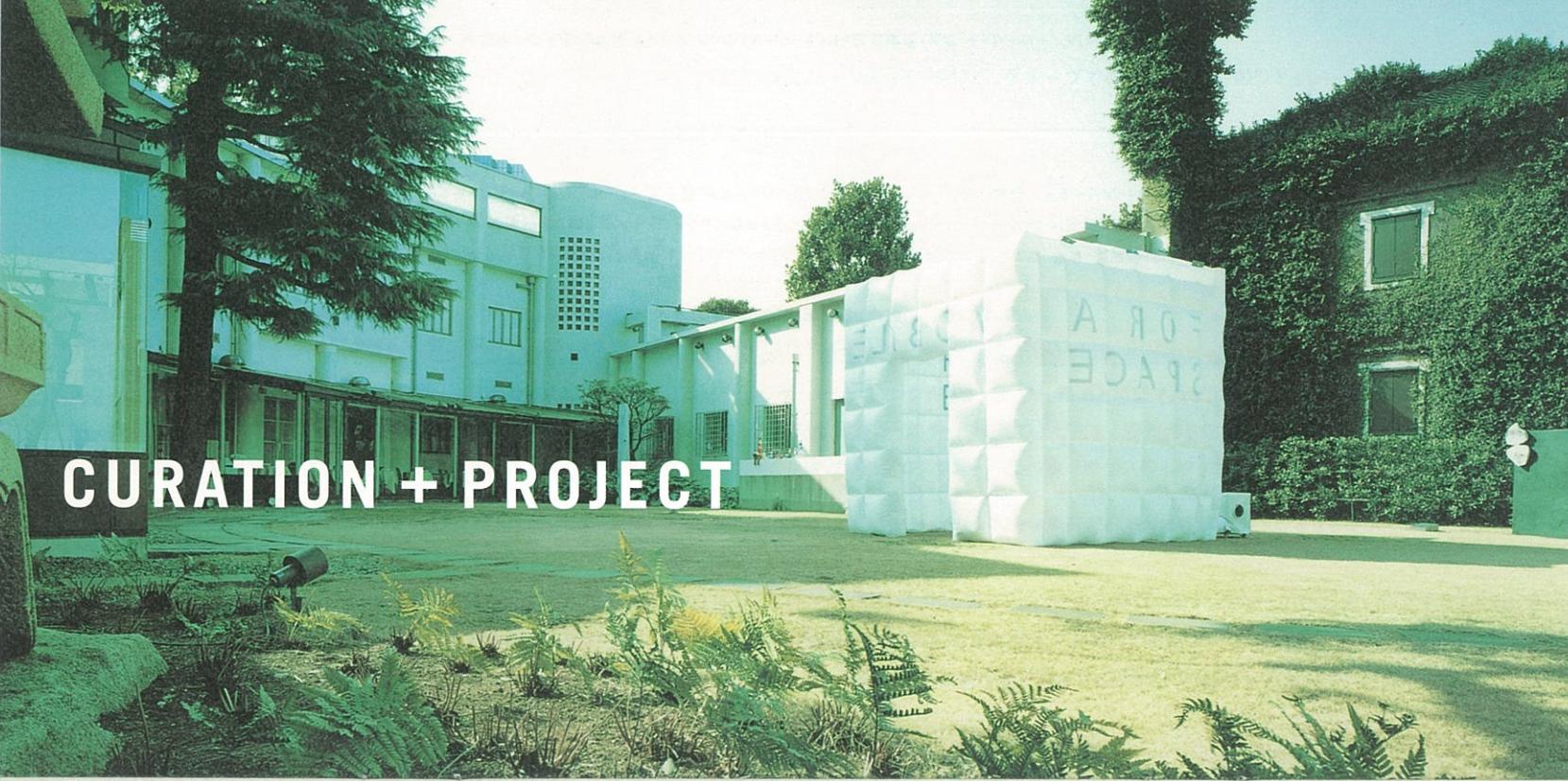
コミュニケーション—PRやプレスリリースなどについて／タクティカル・キュレーティング—低予算、インディペンデント、脱アートスペースの可能性／マネジメントとファンドレイジング—展覧会の実現に向けて

Exhibition Project

キュレーションのプロセス—コンセプト作りとアーティストの選定／展覧会の記録—展覧会の資料化(カタログ制作)

過去のゲストレクチャラー

北澤ひろみ氏(ナンジョウアンドアソシエイツ キュレーター)／近藤健一氏(森美術館 アシスタント・キュレーター)／住友文彦氏(ICC キュレーター/AIT)



CURATION + PROJECT

Johannes Wohnseifer "Prototype for a Mobile Exhibition Space", 2004. (Installation view of exhibition "Art Scope 2004" at the Hara Museum of Contemporary Art) 08-09

キュレーション + プロジェクト

「キュレーション + プロジェクト」は、2005年4月から2006年3月にかけて開講されるコースで、1年を通して理論と実践の面から体系的にキュレーションを考える中級者向けプログラムです。キュレーション・インテンシヴとの違いは、1年間、各自のペースでキュレーションや現代美術に対する考え方を探求し、その成果を「オンペーパー」(展覧会の企画案)という形でコース修了時に提出することです。

コースの内容を補足するプログラムとして、2005年度より新しく 1.フィールド・トリップ、2.アーティスト・コースとの交流を設定しました。フィールド・トリップはコース開講中に行われ、実際に展覧会などのキュレーションの現場などを見学し、キュレーターなどと意見を交換する機会を設けます。また、アーティスト・コースと連携することで、より具体的にキュレーションの実践に取り組むことができる環境を作ります。

このコースは主に、キュレーションの理論と実践の基礎的な考え方を学びたいと考えている学生や社会人、キュレーションを通じてアートを学びたいと考えている方、将来海外留学を考えている方、キュレーションに興味のあるアーティストなどを対象としています。

Curation + Project is a one year course that looks at how contemporary art curating is changing today.
Students work on an individual exhibition proposal which is presented at the end of the year.

[コースの構成]

このコースは、基本的にレクチャーやセミナー、フィールド・トリップで構成され、コース修了時には「オンペーパー」(展覧会の企画案)の提出が課題となります。

レクチャー・シリーズ

レクチャー・シリーズは、コース・ディレクターやゲスト・レクチャラーにより行われます。

キュレーションの理論：キュレーションを考える上で基礎となるもので、現代美術の展覧会を支えるテーマや考え方の紹介、展覧会の歴史や表現形式の変化と変容、近年の国際展の傾向などのテーマで行われます。プログラム・ディレクターやゲスト・レクチャラーにより、知識と経験を踏まえた専門性の高い講義が行われます。

キュレーションの実践：展覧会の制作におけるマネージメントや宣伝広報、展覧会の記録、資金調達などのテーマを取り上げます。展覧会を作るために何にどのくらいのお金がかかるのか、また効果的な宣伝はどのように行なうべきかなどについて、実際に展覧会の制作をしたプログラム・ディレクターやゲスト・レクチャラーによる講義が展開されます。

セミナー

各回レクチャー後、セミナーを行います。レクチャーの内容をいくつかのキーワードをもとにさらに深く掘り下げて考えるセミナーでは、現代美術を理論的に考えるために鍵となる映像やテキストを参考にしながら、重要な用語や考え方を紹介し、ディスカッションを通してより広範な文化的・批評的コンテキストでキュレーションを理解することを目指します。

フィールド・トリップ

キュレーションの現場がどのようなものなのかを、実際に足を運んで経験します。ここではキュレーターなどの展覧会関係者と意見を交わすことにより、キュレーションに対するよりよい理解を促します。また、実際の雰囲気をつかむことで、キュレーションに対するイメージが具体的になることでしょう。これは、レクチャーやワークショップとは別に任意の日程が組まれる予定です。*フィールド・トリップに関わる費用(但し交通費は除く)も受講料に含まれます。

オンペーパー

10-11

受講生が、年間を通して取り組むプロジェクトで、プログラム・ディレクターからのアドバイスを適宜受けながら、最終的に展覧会の企画案をコース修了時に提出する必須課題です。

プログラム

[レクチャーシリーズ]

Critical Concepts and Core Texts

モダンとポストモダン—現代美術の「現代」とは何か／「西洋」とマイノリティーを考える—Magician de la Terre (1989)からDocumenta11 (2002)へ／「アートワーク」から「プロセス」へ—複製技術がアートに投げた石

Curatorial Studies

キュレーションの基礎—キュレーションとは?／キュレーション・マッピング—国際展、国際巡回展、地域ベースの展覧会など多様化するキュレーション

キュレーターの仕事—展覧会の企画立案、予算・運営管理について／キュレーションの歴史—19世紀の博覧会から美術館の誕生、そして美術館を越えて／スペースとは?—美術空間とそれへの抵抗

タクティカル・キュレーティング—低予算、インディペンデント、脱アートスペースの可能性／コミュニケーション—PRやプレスリリースなどについて

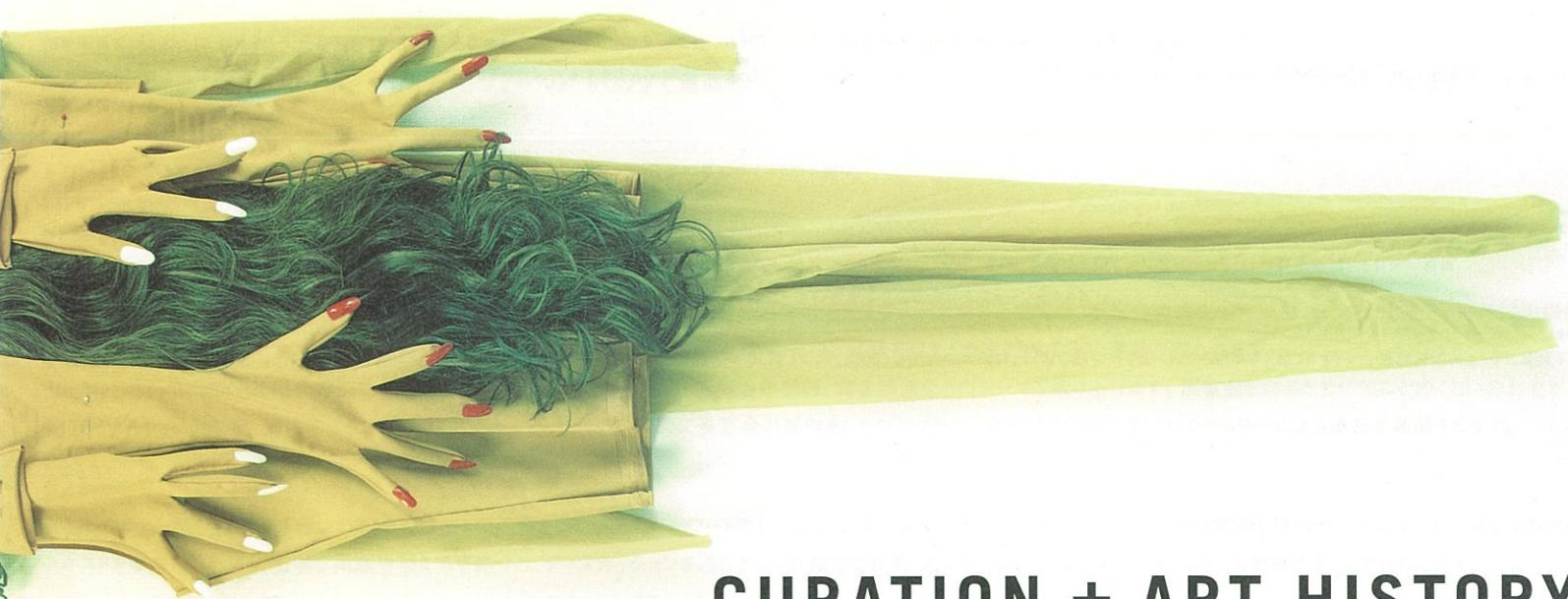
Exhibition Project

キュレーションのプロセス—コンセプト作りとアーティストの選定／展覧会の記録—展覧会の資料化(カタログ制作)

過去のゲスト・レクチャラー

荒木夏実氏(森美術館 キュレーター)／神谷幸江氏(ニューミュージアム アソシエイト・キュレーター)／島袋道浩氏(アーティスト)／杉田敦氏(美術評論家)／建畠哲氏(多摩美術大学芸術学科 教授)

南條史生氏(森美術館 副館長)／平野到氏(埼玉県立近代美術館 学芸員)／山下裕二氏(明治学院大学文学部芸術学科 教授)ほか



CURATION + ART HISTORY



Art work by Aurora Reinhard, 2004 12-13

キュレーション + アート・ヒストリー

「キュレーション + アート・ヒストリー」は、2005年の4月から新たに開講される1年間のコースで、20世紀の美術の変遷を展覧会や作品を通して概観する初・中級者向けプログラムです。

このコースは、20世紀における美術の歩みをテーマ別に概説するレクチャーが中心となります。ここでは、美術史を古い年代から順に通史的に見るのでなく、美術運動や美術表現の形式、作品などを、現在の美術あるいは社会状況との関係において見つめ直す方法を取ります。絵画や写真などのメディアや形式、社会思想と美術、そして日本の戦後美術の3項目についてレクチャーが行われます。

レクチャーは、プログラム・ディレクターやゲスト・レクチャラーによって行われ、レクチャー後はセミナー形式でディスカッションをしながらキュレーションと美術史について、より深い理解を促します。

このコースは主に、現代美術の全体像についてより体系的に学んでみたいと考えている学生、社会人あるいはアーティスト、またはこれからキュレーションに取り組んでみたいと考えている方を対象としています。内容、構成とも、キュレーション + プロジェクトやキュレーション・インテンシヴへの基礎を構築するものとなっています。

[コースの構成]

このコースは、レクチャーおよびセミナーによって構成されます。

レクチャー・シリーズ

レクチャー・シリーズは、コース・ディレクターやゲスト・レクチャラーにより行われます。「メディアと形式」、「日本の戦後美術」、「社会と美術」の3項目のレクチャーから構成されます。

メディアと形式：20世紀の美術史をメディアを中心に考えます。絵画や写真、ビデオアート、身体、コンセプチュアル・アート、ニューメディアなどをテーマとしたレクチャーが行われます。複製技術やデジタル・テクノロジーの到来によって「美術」そのものの変容を相対的に浮き彫りにします。

日本の戦後美術：一般に「正史」といわれるものが日本の戦後美術史ですが、それに対する多層的多角的アプローチを試みます。時代を象徴するような美術運動のほかに、今まで語られる機会が少なかったですが、現在では、重要と考えられる美術的な活動についても触れる予定です。

社会と美術：侵犯や政治性、公共性、社会への提言、ポスト・コロニアル、マイナリティなどのテーマで、社会思想を交えながら社会と美術の関わりを眺めます。「美術」が成立するためには、美術をマーケットや美術館などの社会的な制度と切り離して考えることはできないといつてもいいでしょう。そうした制度に対して、美術はどのように関わることができるかについて考えます。

また、各回レクチャーの後にはセミナーを行います。レクチャーの内容をさらに深く掘り下げる機会となるセミナーでは、ディスカッションを通してより広範な文化的、批評的コンテキストでキュレーションを理解することを目指します。

プログラム

[レクチャーシリーズ]

メディアと形式

ペインティングに正否はあるか／写真という無防備なメディア／ビデオ・アートの現在—ナム・ジュン・パイクから90年代へ／身体の表現と美術—身体は夢を見る

言語と行為=コンセプチュアル・アート／ニュー・メディアはアートになりうるか

日本の戦後美術

「近代化」「民主化」と美術制度の確立／ふたつのアンデパンダン展／引き裂かれたアイデンティティ—大阪万博と美術作家たち／キーワード「身体、機械、モノ」

社会と美術

タブーと美の関係性—汚いものと美について／建築、美術、パブリックスペース—誰のための公共性なのか／「美術」ではない美術—オルタナティヴへ

ポスト・コロニアリズム—記録と証言／マイナリティーの声—フェミニズム、セクシュアル・マイナリティー、エスニック・マイナリティーについて

14-15

“I will use the term modern to designate any science that legitimates itself with references to a metadiscourse of this kind making an explicit appeal to some grand narrative, such as the dialectics of Spirit, the hermeneutics of meaning, the emancipation of the rational or working subject, or the creation of wealth... I define postmodern as incredulity towards metanarratives.”

J-F Lyotard, Trans. by G. Bennington and B. Massumi, “The Postmodern Condition: A Report on Knowledge”, Manchester, 1984, pp. xxiii – xxiv

ARTIST



Video work by Meiro Koizumi, 2001 16 - 17

アーティスト

このコースは、国内外で自分の作品のプレゼンテーションを積極的に行いたいと考えるアーティストのための3ヶ月のコースで、2005年4月、9月、2006年1月より開講されます。キュレーターや評論家に対して自ら作品を紹介することを考えている方、プレゼンテーション・スキルの向上を目指す方、これから海外への留学を考えている方、自らの作品を客観的に眺める機会を得たい方、また自らの作品についてコース・ディレクターや受講生とじっくり話し合ってみたいという方を対象としています。刻々と変化する国際的な現代美術の文脈において、現代美術を考える上で参考される美術史や専門用語、基礎となる社会思想、美術界の仕組み、アーティストとして知っておきたい現在の美術状況などについての講義が中心となります。またコース前半にある作品プレゼンテーションでは、発表された受講生の作品や活動をめぐり、受講生やコース・ディレクターが批判的かつ積極的に広い視点からの議論を試みます。そのほかプログラム・ディレクターの経験に基づき、ポートフォリオ、ステートメント（作品制作意図）の作成についても適宜アドバイスをします。

プログラムは10名という少數制で行われ、最終回のクラスでは、美術専門家（キュレーター、美術評論家など）をゲストとして迎え、各自ベスト・プレゼンテーションを試みます。

Artist course is a three month intensive course offering artists advice on portfolio-making and public presentation.
Lectures covering contemporary theory and ideas are also given.

プログラム

マッピング・アート・シーン（アート界の仕組みを知る）／作品のプレゼンテーションとアーティスト・ステートメントの作成／アーティストの主体性とは何か—近代以降のアートとアーティストの可能性

現代社会の成り立ちと美術の関係性について—スペースと美術について／現代美術の傾向とそのアプローチ—近年の国際展と表現・メディアの多様性を読み解く／専門家を迎えて各自のプレゼンテーション

過去のゲスト

最終回では、専門家に対する各自のプレゼンテーションを行ないます。これまでに以下の方々を招いて行われました。 荒木夏実氏（森美術館 キュレーター）／市原研太郎氏（美術評論家）

神谷幸江氏（ニューミュージアム アソシエイト・キュレーター）／杉田敦氏（美術評論家）／住友文彦氏（ICC キュレーター／AIT）／南條史生氏（森美術館 副館長）ほか

“... postcoloniality must at all times be distinguished from postmodernism. While postmodernism was preoccupied with relativizing historical transformations and contesting the lapses and prejudices of epistemological grand narratives, postcoloniality does the obverse, seeking instead to sublate and replace all grand narratives through new ethical demands on modes of historical interpretation.”

Okwui Enwezor, 'The Black Box' in the catalogue of Documenta 11, Hatje Cantz Publishers, 2002, p. 45

“There are also in every culture, in every civilization, real places – places that do exist and that are formed in the very founding of society – which are something like counter sites, a kind of effectively enacted utopia in which the real sites, all the other real sites that can be found within the culture, are simultaneously represented, contested and inverted... Because these sites are absolutely different from all the sites that they reflect and speak about, I shall call them, by way of contrast to utopia, heterotopias.”

Michel Foucault, 'Of Other Spaces' excerpt from Ed. by N. Mirzoeff, 'Visual Culture Reader', Routledge, 1998, p. 239

AUDIENCE

Art work by Rikke Luther, 2004 20-21

オーディエンス

このコースは、「現代美術って面白ううだけ、いまひとつわからない」「最新の海外アート情報がなかなか得られない」「現代美術のことをもっと知りたい」「現代美術の現場にかかわっている人々に実際に会って話を聞いてみたい」という方を対象とする入門的なコースで、2005年4月から12月まで7ヶ月にわたって開講されます。キュレーターや評論家、アーティストなどによるスライド・レクチャーやトークと、話題の展覧会や美術館、ギャラリー、アート・プロジェクトなどへの訪問で構成され、いずれもそれぞれの場や作品に応じたゲスト・レクチャラーと受講者の対話を中心とします。訪問する場所に応じて、メンバー専用の小型バスを活用することで、見学を効率的で快適なものにします。その他、2005年に行われる国内外の美術展の最新情報も、実際に現地を訪ねた講師がヴィジュアル・イメージを交えてリポートします。現代美術は、現在の社会におけるものの考え方広がりをもたらすものです。興味を共有する人たちやゲストと共に見て話し合うことで、より能動的な鑑賞の機会を提供します。

2004年度 主な展覧会訪問先および講義内容

【訪問先】水戸芸術館「孤独な惑星—Lonely Planet」展／森美術館「Modern Means モダンってなに? アートの継続性と変化、1880年から現在まで」+ イリヤ&エミリア・カバコフ展「わたしたちの場所はどこ?」

東京オペラシティーアートギャラリー「ウォルフガング・ティルマンズ Freischwimmer」展／東京アート・スポット・ツアーアート & river bank, SCAI THE BATHHOUSE, AIT アーティスト・イン・レジデンス

アーカス・アーティスト・イン・レジデンス:オープン・スタジオ

【講義】「デジグラフィーってなんだ?」飯沢耕太郎氏(写真評論家)／「国際展を斬る:ベルリン・ビエンナーレ、リヨン・ビエンナーレ報告」市原研太郎氏(美術評論家)

「画廊の仕事:東京画廊の歴史とこれから」山本豊津氏(東京画廊代表)ほか



MAGAZINE

Video work by Kyungah Ham, 2004 22-23

マガジン

このコースは、アーティストやキュレーター、オーディエンス、コレクター、学生、社会人などを対象とする3ヶ月のコースで、2005年4月、10月、2006年1月より開講されます。海外のアート専門誌やwebなどを通して、「世界のアートの今を知りたい」、「注目のアーティストや新しい美術館の動き、話題となった展覧会に対する批評や議論、アート・マーケットのニュースなどに触れたい」という方のためのコースです。欧米やアジア諸国では、現代美術の専門誌が数多く出版され、それらの誌上では美術を考える際に有効な指標となる「評論」や「批評」が掲載され、理論付けや活発な議論が展開されています。例えば、近年の絵画の傾向に言及するものとして「ネオ・バロック」というスタイルが取り上げられたり、2004年11月のニューヨーク近代美術館の再開館においては建築の是非をめぐる議論が起きています。それは、現代美術のみならずそれを支える形式や制度あるいは建築なども視野に入れ、現代美術を多角的に読み解いているともいえるでしょう。マガジン・コースは、毎月発行されている海外の現代美術の雑誌記事やweb上の記事を取り上げ、グループ・ディスカッションや頻繁に使われる英語の専門用語の解説などを行いながら、世界のアートの動向をつかみます。

プログラム

最新記事が取り上げられるため、クラスの内容は各期により異なります。

雑誌の例

Art Forum (アメリカ) / Art in America (アメリカ) / Frieze (イギリス) / Contemporary (イギリス) / Art Monthly (イギリス)

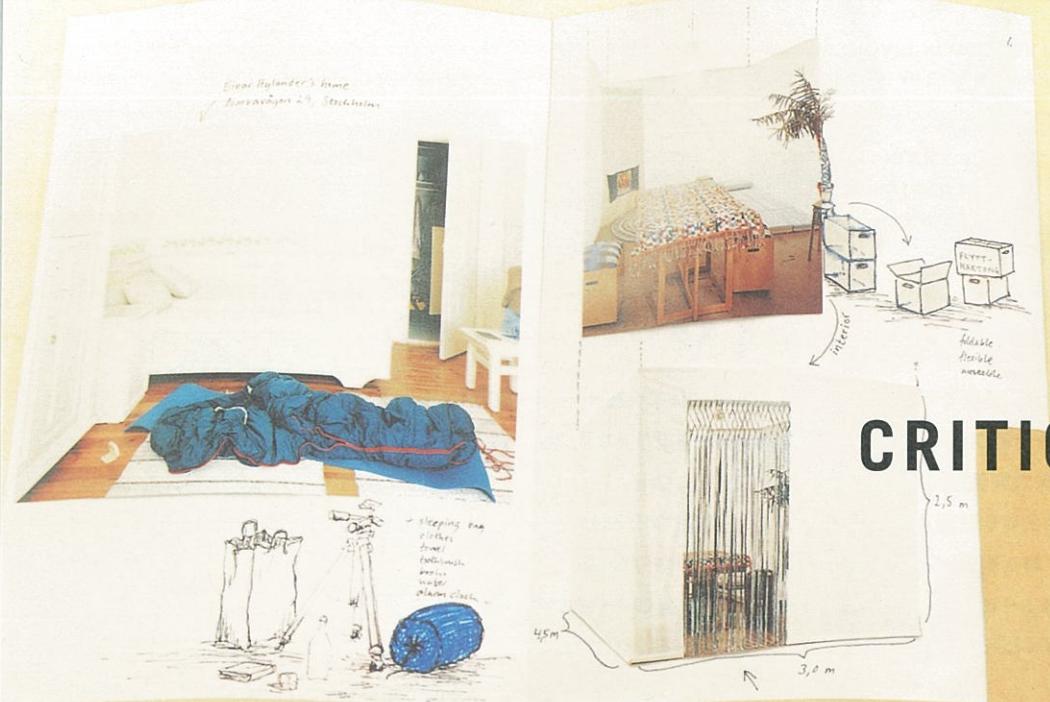
Art Newspaper (イギリス) / Tama Celeste (イタリア) / Parkett (スイス) / YISHU (中国) / Art in India (インド) など

2004年度に参照した主な記事

"fahrenheit 9/11" from Tama Celeste / "Destruction and Nostalgia - Cornelia Parker's Cold Dark Matter: An Exploded View" from Modern Painters

"the neo-baroque era" from Tama Celeste / "Do contemporary dealers still need galleries?" from THE ART NEWSPAPER / "Heir Unapparent", Gregory Williams on Roger M. Buergel

Magazine is a three month fortnightly course centred around reading and discussing current articles in English language contemporary art magazines.



CRITICAL READERS

Artist Book by Camilla Carlsson, 2004 24 - 25

クリティカル・リーダーズ

「クリティカル・リーダーズ」は、多様化する現代美術の表現について、なぜそれらが美術の表現として成立するかを考えたいアーティストやキュレーター、学生、社会人などを対象とする3ヶ月のコースで、2005年4月、9月、2006年1月より開講されます。マガジン・コースに比べ、英語と美術の知識レベルがより専門的になります。国際展などのカタログ・エッセイでは、展覧会のテーマを支える要素として、思想家や哲学者の著作から重要な考え方方が引用されているのを目指します。それは現代美術の表現や方法が、世相を鋭く捉える思考の方法と無関係ではないと共に、社会の諸相を反映する有効な手段であることを示しているといえるでしょう。クリティカル・リーダーズでは、「表現の現在」を支える様々な考え方を、キュレーター、思想家、哲学者などの見解を参考し、読み解くことを目指します。美術作品や展覧会、公共のメディア、映画などにおいて、どのような事柄がどのような視点でどのように表されているかを探り、その有効性や問題点についてディスカッションします。主に英語で書かれた文献を精読するため、英語のレベルが一定以上ある方を対象とします。受講者は事前に配布されるテキストを読み、予習を行うことが望されます。

テキスト(予定)

Nicolas Bourriaud, "Relational Aesthetics", Les Presses du Reel, 2000

Michel Foucault, "Of Other Spaces", basis of a lecture given by Michel Foucault in 1967

Boris Groys, "Art in the age of biopolitics from artwork to art documentation", essay from Documenta 11 catalogue, 2002

A. Negri & M. Hardt, "Multitude", Penguin Press, 2004

**Critical Readers is a fortnightly three month course centred around
close readings of selected critical and theoretical texts which do not have Japanese translations.
Scholarly academic texts as well as catalogue essays are read and discussed.**

CURATION INTENSIVE

キュレーション・インテンシブ [4ヶ月]

期間＝2005年4月6日[水]－2005年8月3日[水] 毎週水曜日

時間＝19:00－21:00 場所＝AIT ルーム(代官山) 定員＝10人

費用＝224,700円 [受講料195,000円+施設維持費2,000円+資料費15,000円+選考費2,000円+消費税10,700円]

*上記の金額には、展覧会制作費用が一部含まれています。

受講資格＝申込書とインタビューによる選考あり。

CURATION + PROJECT

キュレーション + プロジェクト [12ヶ月]

期間＝2005年4月12日[火]－2006年3月14日[火] 第2・4週火曜日 8月中旬より9月中旬までは休講です。

時間＝19:00－21:00 場所＝AIT ルーム(代官山) 定員＝15人

費用＝201,600円 [受講料180,000円+施設維持費2,000円+資料費10,000円+消費税9,600円]

受講資格＝特になし。ただし、定員を超える場合、選考あり。

CURATION + ART HISTORY

キュレーション + アート・ヒストリー [12ヶ月]

期間＝2005年4月7日[木]－2006年3月9日[木] 第1・3・5週木曜日 8月中旬より9月中旬までは休講です。

時間＝19:00－21:00 場所＝AIT ルーム(代官山) 定員＝18人

費用＝201,600円 [受講料180,000円+施設維持費2,000円+資料費10,000円+消費税9,600円]

受講資格＝特になし。ただし、定員を超える場合、選考あり。

ARTIST

アーティスト [3ヶ月]

期間＝春 2005年4月23日[土]－2005年7月9日[土] 第2・4週土曜日

秋 2005年9月24日[土]－2005年12月10日[土] 第2・4週土曜日

冬 2006年1月21日[土]－2006年3月18日[土] 第1・3・5週土曜日

時間＝14:00－16:00 場所＝AITルーム(代官山) 定員＝各回10人

費用＝38,850円 [受講料35,000円+施設維持費2,000円+消費税1,850円]

受講資格＝特になし。ただし、定員を超える場合、インタビューによる選考あり。

MICRO LIBRARY

AITルームは、キュレーションに関する専門書、現代美術の展覧会カタログ、雑誌などのミニ・アーカイブがあり、受講生は、これを利用することができます。

特別講座

上記のコース以外にも、サマー・コースや短期集中講座をAITや東京以外の場所で開講する予定です。詳細は、AITにお問い合わせ下さい。

AUDIENCE

オーディエンス [7ヶ月]

期間＝2005年4月16日[土]－2005年12月3日[土] 第1・3・5週土曜日

8月と9月は休講です。

時間＝14:00－16:00(見学する日は、時間を変更することができます。)

場所＝AITルーム(代官山) および訪問先

定員＝12人

費用＝75,600円 [受講料70,000円+施設維持費2,000円+消費税3,600円]

受講資格＝特になし。

MAGAZINE

マガジン [3ヶ月]

期間＝春 2005年4月19日[火]－2005年7月5日[火] 第1・3・5週火曜日

秋 2005年10月4日[火]－2005年12月6日[火] 第1・3・5週火曜日

冬 2006年1月17日[火]－2006年3月21日[火] 第1・3・5週火曜日

時間＝19:00－21:00

場所＝AITルーム(代官山)

定員＝各回12人

費用＝36,750円 [受講料33,000円+施設維持費2,000円+消費税1,750円]

受講資格＝特になし。ただし、定員を超える場合選考あり。

26-27

CRITICAL READERS

クリティカル・リーダーズ [3ヶ月]

期間＝春 2005年4月14日[木]－2005年6月23日[木] 第2・4木曜日

秋 2005年9月22日[木]－2005年12月8日[木] 第2・4木曜日

冬 2006年1月19日[木]－2006年3月30日[木] 第1・3・5木曜日

時間＝19:00－21:00 場所＝AITルーム(代官山) 定員＝10人

費用＝38,850円 [受講料35,000円+施設維持費2,000円+消費税1,850円]

受講資格＝目安として英検準1級、TOEIC650以上の英語力を有する方。

お申し込み方法＝AITのホームページよりお申し込みいただくか、下記問い合わせ先まで、お名前、ご住所、ご連絡先(電話、ファックス、携帯電話など)を明記の上、メールにて申込書をご請求ください。
地図はホームページをご参照ください。

特定非営利活動法人 アーツイニシアティヴトウキョウ [AIT／エイト]

〒150-0033 東京都渋谷区猿楽町30-3 ツインビル代官山A-502 Tel: 03-5489-7277 Fax: 03-3780-0266 E-mail: office@a-i-t.net http://www.a-i-t.net



28-29

WHAT IS AIT?

AITとは? —— AIT (Arts Initiative Tokyo) は、2002年5月に東京都より認証をうけたNPO法人で、東京を中心としたさまざまな場所に現代の視覚芸術にアクセスするための「プラットフォーム」の創出をめざして設立されました。「プラットフォーム」とは、AITが企画、制作していくさまざまなプログラムで、アートに興味のあるすべての人が立ち寄れる場です。AITでは、教育プログラム「MAD (Making Art Different)」のほか、アーティストやキュレーターなどによるトーク、シンポジウム、ワークショップ、展覧会、ラウンジ系イベントなどのイベント・プログラム、国内外のアーティストやキュレーターを対象としたレジデンス・プログラム、視覚芸術に関わる批評や文化の今をバイリンガルで発信するパブリケーションなどがあります。AITは、「不必要的コストを最小限に、必要なコンテンツを最大限に」を活動哲学に、個人や企業、財団、文化機関などと連携しながら、軽やかにフレキシブルに、視覚芸術を考える場の創出をめざします。

AIT is a not for profit contemporary art platform which creates a range of programmes and events in Tokyo, JAPAN.

It is the first initiative of its kind to be set up in Tokyo, where the situation for contemporary art is changing dramatically with new museum laws and increasing public interest.

AIT keeps its activities un-rooted, working without a costly infrastructure.

In addition to our ongoing education, residency and information programmes, we often collaborate with other organizations or act alone with speed to make symposiums, club nights, slide talks, curators and artists talks, and exhibitions in different sites around Tokyo.

ロジャー・マクドナルド [コース・ディレクター]

1971年生まれ。イギリスのケント大学にて、宗教学修士課程修了後、美術理論にて博士号を取得。1998年より、インディペンデント・キュレーターとして、国内外で数々の小規模な展覧会を企画。また、「横浜トリエンナーレ2001」では、南條史生氏のアシスタント・キュレーターとして活動。東京藝術大学、東京造形大学、多摩美術大学、テート・ブリテンでの講義も行う。2005年度より武蔵野美術大学非常勤講師。これまでに「横浜トリエンナーレ2001」のアシスタント・キュレーターとして活動した他、主に次の4つのプロジェクトがある。美術の作品を埋め、発掘し、それをギャラリーのスペースに展示した「エクスカバーション(Excavations)」(Aki-Ex Gallery／東京／1998)、イギリスのアーティストが東京で展覧会をするために自分の作品を様々なバッグに入れて持ってくる「バッグズ(Bags)」(Gallery-ES／東京／1998)、作品がEメールやファックスの指示書によってキュレーターに送られ、キュレーターがそれをもとに展覧会を作った「ジャパンセンター：アート版(Japan Centre: Art Version)」(自宅／ロンドン／1999)。また、2002年より続いている展覧会プロジェクト「ムーヴィング・コレクション(Moving Collection)」は、スーツケースで移動しながら展示のテーマと内容を変化させてゆく。興味の対象は幅広く、キュレーションの歴史、特権的なアートスペース以外で行われるインディペンデントなキュレーションの可能性の研究のほか、キュレーションと社会政治研究のための個人的なアーカイヴ作りに取り組む。低予算で社会に介入してゆくインディペンデントな動き「タクティカル・キューリング(tactical curating)」を調査するウェブログ「タクティカル・ミュージアム(The Tactical Museum)」を主宰している。<http://www.rogermc.blogs.com/tactical/>

小澤慶介 [コース・ディレクター]

1971年生まれ。明治学院大学文学部フランス文学科卒業後、ロンドン大学ゴールドスミスカレッジにて美術史の修士号を取得。これまでに、麹町画廊においてサキサトムやウリ・ツایグの展覧会や、ポスト9.11における記憶の生成をテーマにした「your memorabilia 記憶へのまなざし」(東京国際フォーラム／東京／2003)、映像と社会の様々な関係について眺めた「In different spaces」(トーキョーワンダーサイト／東京／2003)、強大な覇権が世界をひとつにまとめようとするなかでパラダイスというテーマにアプローチした「paradise views 楽園の果て」(東京国際フォーラム／東京／2004)などのビデオ・アートのグループ展を企画。また、「借景—Slowly Becoming—」(東京日仏学院／東京／2004)では、美術館以外の場所で、作品が日常の風景に介入し同化してゆくというインスタレーションの展覧会を手がけ、場と作品と鑑賞者の持続的な関係による展覧会、あるいは作品という概念を追究した。これらのプロジェクトは、後期近代あるいはポストコロニアルな時代において様々な文化のモードをどのように表すことができるかという表象の問題系に対する興味から起こされている。最近のリサーチの対象は20世紀、21世紀の歴史あるいは地勢学的な位置とそれを眼差す政治的主体によって、断片化をまぬがれなかった「沖縄」の表象について。

アートフェア東京アソシエイト・ディレクター、明星大学非常勤講師(映像論)。

30-31

住友文彦 [レクチャラー]

1971年生まれ。東京大学大学院総合文化研究科表象文化論コース修了。スパイ럴、金沢21世紀美術館建設事務局学芸員を経て、現在はICCのキュレーター。韓国、中国、日本のアーティストがテクノロジーの発達をそれぞれの問題として受け止めていくことをテーマとした「アウト・ザ・ウインドウ」展(国際交流基金アジアセンター／東京／2004)、複製/伝達や共同制作を個人のレベルでできることを可能にしたメディアの普及と、表現スタイルの変化をテーマにした「リアクティヴィティ」展(ICC／東京／2004)などをこれまでに企画。主な共著に、1990年代以降の現代美術において大きな流れを形成した<関係性の美学>を考えるうえで重要なアーティスト、リクリット・ティラヴァニヤを取り上げた「身体の贈与」(共著『表象のディスクール6 創造』、小林康夫・松浦寿輝編、東京大学出版会、2000年)、近年増加している映像・音響作品について書いた「映像の中へ」(共著『21世紀の出会いー共鳴、ここ・から』、金沢21世紀美術館、淡交社、2004年)、情報社会の到来と美術館の展示システムが持つ表象機能について論じた「情報と美術-美術館の廃墟、その瓦礫にて」(連載『datxt.』9～12号、京都芸術センター)などを執筆。各種雑誌に執筆、および大学での講義をおこなう。近現代の美術、及び美術を成立させている制度に关心を持つ。なかでも、日本の戦後美術を現在の視覚文化論を応用しながら再考察することと、テクノロジーの発達がもたらしている社会や文化の変化を研究することに取り組んでいる。

小沢有子 [マネージング・ディレクター]

学習院大学法学部政治学科卒業後、イギリスのサザビーズ・インスティテュート・オブ・アーツにて現代美術ディプロマコースを修了。帰国後、ナンジョウアンドアソシエイツにて「イタリア現代美術1945-1995」展、「大林組コーポレートアートプロジェクト」、「サンパウロビエンナーレ2002」など国内外の展覧会やアート・プロジェクトのコーディネート、コンサルタント、マネージメントを担当。2002年、NPO法人アーツイニシアティヴトウキョウを立ち上げる。東京藝術大学にて講義もおこなう。

宮原洋子 [サポート]

慶應義塾大学文学部哲学科美学美術史学専攻卒業。1995-2002年ナンジョウアンドアソシエイツにおいて、国際美術評論家連盟日本大会事務局、「横浜トリエンナーレ2001」ボランティアスタッフのコーディネート、MADの立ち上げ等に携わる。2002年からは森美術館副館長秘書として、開館準備段階より勤務し、現在に至る。



<http://www.a-i-t.net>